

6 令和4年度浜岡原子力発電所周辺環境放射能測定計画

令和4年2月14日
静岡県環境放射能測定技術会

浜岡原子力発電所の安全確保等に関する協定書第4条第1項の測定計画を次のとおり定める。

1 目的

浜岡原子力発電所周辺の環境放射能の測定は、次に掲げる目的の下、実施するものとする。

(1) 周辺住民等の被ばく線量の推定及び評価

浜岡原子力発電所の周辺住民等の健康と安全を守るため、平常時から、環境における浜岡原子力発電所起因の放射性物質又は放射線による周辺住民等の被ばく線量を推定し、評価する。

(2) 環境における放射性物質の蓄積状況の把握

浜岡原子力発電所からの影響の評価に資するため、平常時から、浜岡原子力発電所の運転により放出された放射性物質の環境における蓄積状況を把握する。

(3) 浜岡原子力発電所からの予期しない放射性物質又は放射線の放出の早期検出及び周辺環境への影響評価

浜岡原子力発電所から敷地外への予期しない放射性物質又は放射線の放出を検出することにより、浜岡原子力発電所の異常の早期発見に資する。

また、浜岡原子力発電所から予期しない放射性物質又は放射線の放出があった場合に、その影響を的確かつ迅速に評価するため、平常時モニタリングの結果を把握しておく。

(4) 緊急事態が発生した場合への平常時からの備え

緊急事態が発生した場合に、緊急事態におけるモニタリングへの移行に迅速に対応できるよう、平常時から緊急事態を見据えた環境放射線モニタリングの実施体制を備えておく。

(5) 補足参考測定

(1)から(4)までの目的を達成する上で参考となるもの、浜岡原子力発電所からの影響を判断する上で参考となるもの、環境中の経時変化を把握する上で有効なもの又は測定技術の維持が必要と考えられるものについては、平常時から測定を行い、その結果を把握しておく。

2 対象範囲

測定を行う範囲は、陸上については浜岡原子力発電所を中心とした概ね半径10kmの地域とし、海上については浜岡原子力発電所の前面海域で概ね半径10kmの海域とする。

3 実施機関

測定は次に掲げる機関が行うものとし、御前崎市、牧之原市、掛川市及び菊川市は試料採取等において協力する。

- (1) 静岡県環境放射線監視センター
- (2) 中部電力株式会社浜岡原子力発電所

4 実施内容

1の目的ごとに実施する内容は、別記1に掲げるとおりとする。

5 測定方法等

測定方法等は、原子力規制庁が作成する「放射能測定法シリーズ」等を参考に別に定めるものとする。

6 実施計画

令和4年度の実施計画は、別記2に掲げるとおりとする。

7 測定結果の報告

技術会は、原則として四半期ごとに、各実施機関から測定結果の報告を受けることとする。

8 測定結果の評価

技術会は、実施機関から報告を受けた測定結果について、別に定める方法により評価を行うものとする。

9 調査結果のまとめ

技術会は、測定結果及び評価結果をとりまとめ、調査結果書を作成する。

別記1 目的ごとの実施項目等

目 的	実 施 項 目	測 定 対 象	測 定 方 法	備 考
① 周辺住民等の被ばく線量の推定及び評価	空間放射線量率の測定	γ 線 1時間平均値 ¹⁾	NaIシンチレーション検出器等による連続測定	
	環境試料中の放射能の測定 ²⁾	大気中浮遊塵 陸水 農畜産物 海産生物	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析 放射性ストロンチウム分析 ゲルマニウム半導体検出器による機器分析 放射性ストロンチウム分析	ダストモニタ採取試料
② 環境における放射性物質の蓄積状況の把握	環境試料中の放射能の測定 ²⁾	土壤 海底土	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析	
③ 原子炉施設から予期しない放射性物質又は放射線の放出の早期検出及び周辺環境への影響評価	空間放射線量率の測定	γ 線 10分間平均値 ¹⁾	NaIシンチレーション検出器等による連続測定	
	環境試料中の放射能の測定	大気中浮遊塵 集塵中の全 α ・全 β 放射能比 (1時間平均値) ¹⁾ 集塵中の全 β 放射能 (1時間平均値) ¹⁾ 集塵終了6時間後の全 β 放射能 (1時間平均値) ¹⁾ ⁵⁾	ダストモニタによる連続測定	
	排水の全計数率の測定	γ 線 10分間平均値	放水口モニタによる連続測定	
④ 緊急事態が発生した場合への平常時からの備え	環境試料中の放射能の測定 ²⁾	農畜産物 海産生物 陸水 土壤 海水	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析 トリチウム分析 放射性ストロンチウム分析 ゲルマニウム半導体検出器による機器分析 放射性ストロンチウム分析 ブルトニウム分析 トリチウム分析	

⑤ 準足参考測定	積算線量の測定	γ 線 3か月間積算値	蛍光ガラス線量計による積算線量測定
	環境試料中の放射能の測定 ^{②)}	降下物 γ 線放出核種 ^{③)}	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析
	指標生物(松葉)	γ 線放出核種 ^{④)}	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析
	海水	γ 線放出核種 ^{③)}	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析
	大気中水分子	H-3	トリチウム分析

注1) テレメターシステムによる演算値とする。

注2) 試料及び採取地点の選定にあたり、次の点を考慮する。

- ・ 测定の目的に適したものか。
- ・ 毎年実施するものについては、継続的に採取が可能であるか。
- ・ 農畜産物及び海産生物については、生産量や漁獲量から地域の代表性があるか。
- ・ 採取計画全体における採取時期等のバランスがとれているか。
- ・ 地域の要望があるか。

注3) Co-60、Cs-134、Cs-137、その他検出された人工放射性核種を報告対象とする。また、測定の参考とするため、K-40、Be-7などの自然放射性核種についても、試料の種類に応じ報告対象に加える。

注4) 陸水、人根の葉部、原乳、藻類及び松葉については、I-131を報告対象とはしない。

注5) 集塵終了6時間後の全β放射能、全β放射能比及び集塵中の全α・全β放射能の測定結果を評価する場合の参考とする。

令和4年度実施計画

1 空間放射線量

(1) 空間放射線量率

市名	地点名 モニタリングステーション名	測定機関	地点数	測定期間	備考
御前崎市	白砂	県	14	通年 (連続測定)	
	中町	中部電力			
	桜ヶ池公民館	中部電力			
	上ノ原	中部電力			
	佐倉三区	県			
	平場	県			
	白羽小学校	中部電力			
	旧監視センター	県			
	草笛	中部電力			
	浜岡北小学校	県			
牧之原市	新神子	中部電力			
	地頭方小学校	中部電力			
	掛川市	大東支所			
菊川市	菊川市水道事務所	県			

(2) 積算線量

市名	地点名 名称	測定機関	地点数	測定期間	年測定数	備考
御前崎市	芹沢	県 中部電力	12	4~6月 7~9月 10~12月 1~3月	96	※1
	西山					
	上比木					
	合戸東前					
	門屋石田					
	中尾					
	朝比奈原公民館					
	旧地頭方中学校					
牧之原市	菅山保育園					
	鬼女新田公民館					
	掛川市					
菊川市	千浜小学校					
	東小学校					

※1 「1 目的」の(5)による補足参考測定

2 環境試料中の放射能

(1) 陸上試料

分類	試料名	地点名		測定機関	地点数	測定時期	年測定数 ※1					備考
		市名	地名・名称				γ	Sr-90	H-3	Pu	計	
大気	大気中浮遊塵	御前崎市	白砂	県	5	通年 (連続測定)						全 α ・全 β 放射能
			中町	中部電力								
			平場	県								
		牧之原市	白羽小学校	中部電力								
			地頭方小学校	中部電力								
大気	大気中浮遊塵	御前崎市	白砂	県	5	毎月	60					ろ紙を回収し測定
			中町	中部電力								
			平場	県								
		牧之原市	白羽小学校	中部電力								
			地頭方小学校	中部電力								
陸水	上水	御前崎市	市役所	県	2	4, 7, 10, 1月	16	8 ^{※2}			24	注) 2地点を交互に年2回
	上水	御前崎市	(新神子)	中部電力				(R6)				
	上水	御前崎市	(新神子)	中部電力								
土壤	土壤	御前崎市	下朝比奈	県	4	6, 9, 12, 3月	32					
			新神子	中部電力								
			比木	県								
	土壤	牧之原市	笠名	中部電力				(R7)				※2 5年に1回 (Puは最初の1回のみ。)
			(1地点)	県				(R6)				
農畜産物	玄米	御前崎市	下朝比奈	県	2	10月	4	4			8	穀類
			牧之原市	笠名				(R8)				
	玄米	掛川市	(1地点)	県				(R5)				穀類 ※2 5年に1回
			(1地点)	中部電力				(R7)				
			(1地点)	県				(R6)				
			(1地点)	中部電力				(R5)				
	すいか	御前崎市	八千代	県				7月	4			4 うり類
	キャベツ	御前崎市	中原	中部電力				2月	2			4 葉菜類
	白菜	御前崎市	雨垂	県				12月	6			6
		牧之原市	上ノ原	中部電力								
	レタス	菊川市	笠名	県								
		菊川市	(1地点)	中部電力				(R8)				葉菜類
		菊川市	(1地点)	県				(R5)				※2 5年に1回
		菊川市	(1地点)	中部電力				(R7)				
	たまねぎ	御前崎市	池新田	県				1月	2			6 韭菜類
		御前崎市	白浜	中部電力				2月				
		牧之原市	堀野新田	県								
	白ねぎ	御前崎市	合戸	中部電力				12月	2			2
	かんしょ	御前崎市	新神子	県				9月	2			2 いも類
	大根	御前崎市	洗井	中部電力				1月	6			12 根菜類
		御前崎市	白浜	県								
		牧之原市	堀野新田	中部電力								
	みかん	牧之原市	堀野新田	県				11月	2			2 かんきつ類
	茶葉	御前崎市	朝比奈	県	5	4月	10		2			
		御前崎市	新野	中部電力					2			
		牧之原市	新谷	県					2			
		菊川市	笠名	中部電力					2			
	茶葉	菊川市	川上	県								
		菊川市	小笠東	中部電力				4月	2			2
		菊川市	(1地点)	県				(R5)				※2 5年に1回
	原乳	掛川市	下土方	中部電力	2	4, 7, 10, 1月	16		8			24
		菊川市	嶺田	県								
雨水・ちり	降下物	御前崎市	池新田	県	1	毎月	24				24	※3
指標生物	松葉	御前崎市	池新田	中部電力	3	6, 9, 12, 3月	24				24	※3
			平場前	県								
大気	大気中水分	御前崎市	白砂	県	4	毎月			48		48	※3
			平場	県								
			中町	中部電力								
			上ノ原	中部電力								
							合計	224	36	48	2	310

※1 県と中電の測定数の合計

■■■■■は令和5~8年度実施予定分

※2 「1 目的」の(4)によるバックグラウンドの把握のみを目的とした測定

※3 「1 目的」の(5)による補足参考測定

(2) 海洋試料

分類	試料名	地点名	測定機関	地点数	測定時期	年測定数 ※1				備考	
						γ	Sr-90	H-3	計		
海底土	海底土 (表層土)	菊川河口	県 中部電力	10	5, 8, 11, 12月	80			80		
		高松沖									
		尾高漁場									
		中根礁									
		御前崎港									
		浅根漁場									
		1, 2号機放水口付近									
		取水口付近									
		3号機及び4号機放水口付近									
海産生物	周辺海域	5号機放水口付近									
		しらす			1	4, 8, 10月	6	6		12	魚類
		ひらめ			1	1月	2			2	
		あじ			1	4, 11月	4			4	
		かさご			1	11月	2	2		4	
		さざえ			1	1月	2	2		4	
		はまぐり			1	1月	2			2	貝類
		かき			1	7月	2			2	
		いせえび			1	10月	2	2		4	
		たこ			1	5月	2			2	
		なまこ			1	1月	2			2	棘皮類
		わかめ			1	2月	2	2		4	
海水	海水 (表層水)	菊川河口	県 中部電力	10	5, 8, 11, 12月	80			80	※3	
		高松沖									
		尾高漁場									
		中根礁									
		御前崎港									
		浅根漁場									
		1, 2号機放水口付近									
		取水口付近									
		3号機及び4号機放水口付近									
海水	海水 (表層水)	5号機放水口付近									
		(菊川河口)				(R7)					※2 5年に1回
		(高松沖)				(R8)					
		(尾高漁場)				8月		4	4		
		(中根礁)				(R5)					
		御前崎港				(R6)					
		浅根漁場				合計	188	14	4	206	

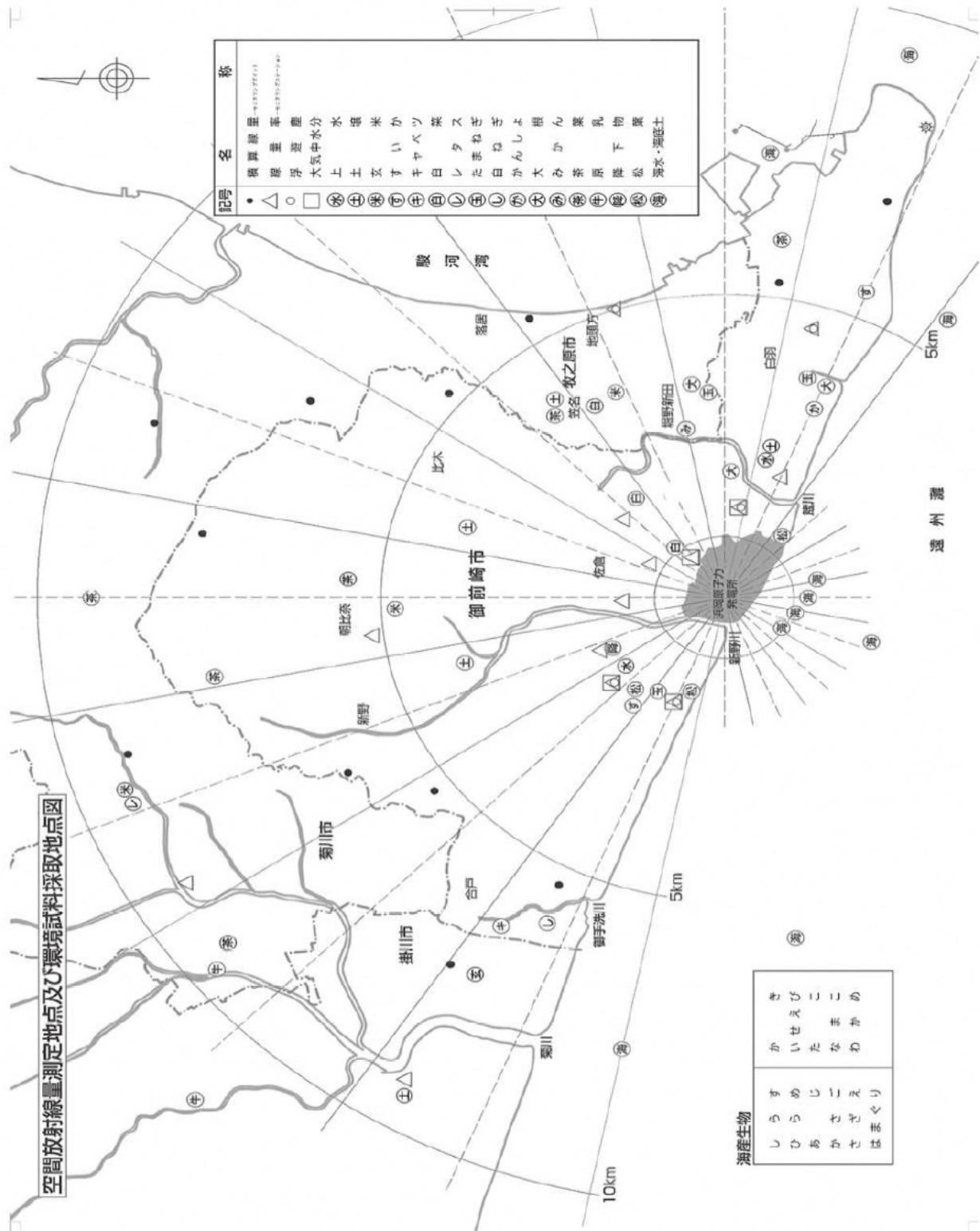
※1 県と中電の測定数の合計

※2 「1 目的」の(4)によるバックグラウンドの把握のみを目的とした測定

※3 「1 目的」の(5)による補足参考測定

3 排水の全計数率

地点名	測定機関	地点数	測定期間	備考
1, 2号機放水口モニタ	中部電力	4	通年 (連続測定)	
3号機放水口モニタ				
4号機放水口モニタ				
5号機放水口モニタ				



7 浜岡原子力発電所周辺環境放射能測定に係る測定法及び評価方法

令和2年3月19日
静岡県環境放射能測定技術会

浜岡原子力発電所周辺環境放射能測定計画に基づき実施する測定について、測定法及び測定結果の評価方法を次のとおり定める。

第1 測定法

1 測定方法

(1) 空間放射線

① 線量率

項目	内 容	備 考
測定対象	γ (X) 線 (50keV~3MeV)	
測定方法	NaI シンチレーション検出器等による連続測定 放射能測定法シリーズ*「連続モニタによる環境 γ 線測定法」に準拠	2分間平均値、10分間平均値及び1時間平均値をテレメータにより取得する。
測定器	温度補償型 3インチ×3インチ NaI(Tl)シンチレーション検出器	
温度管理	24時間空調 (検出器 25°C±2°C)	
測定範囲	バックグラウンドレベル～ 10^5 nGy/h	
エネルギー特性補償	G(E)関数荷重演算方式	
線量率換算定数	テレメータシステムへパルスを出力する場合、出力パルスに対し、通常型検出器にあっては 44.0cpm/(nGy/h)、方向特定可能型検出器にあっては 40.4cpm/(nGy/h) *とする。	* 株日立製作所製に限る。
テレメータへの送信間隔	2分ごと	
宇宙線成分の取扱い	宇宙線寄与分としての定数加算をしない。	H23年度から定数加算を廃止
測定高さ	局舎屋根上に検出器を設置する場合は地上約3メートル、地表面上に検出器を設置する場合は1メートルとする。	
その他	緊急時用及び NaI (Tl) シンチレーション検出器の測定で欠測が生じた場合の代替として、電離箱検出器等を併設する。	

② 積算線量

項目	内 容	備 考
測定対象	γ (X) 線 (30keV～3MeV)	
測定方法	蛍光ガラス線量計による積算線量測定 放射能測定法シリーズ「蛍光ガラス線量計を用いた環境 γ 線測定法」に準拠	
測定器	蛍光ガラス線量計 (RPLD)	
素子数	測定機関ごとに 1 地点あたり 5 素子配置	静岡県と中部電力 飯浜岡原子力発電所の素子は、同じ收納箱に挿入する。
素子の更新頻度	5 年	
収納箱	塩化ビニル製 (内容器: ポリウレタン製)	
測定範囲	10 μ Gy～10Gy	
積算期間	約 3 か月間	
測定結果の検定方法	Grubbs の棄却方法 (原則 1 回)	
測定高さ	地上 約 2.5～3.5 メートル	

(2) 環境試料中の放射能

① 全 α ・全 β 放射能

項目	内 容	備 考
測定対象	α 線及び β 線	
測定方法	ダストモニタによる連続測定 放射能測定法シリーズ「全ベータ放射能測定法」及び「大気中放射性物質のモニタリングに関する技術参考資料」を参考に、大気中浮遊塵の集塵中の全 α ・全 β 放射能比、集塵中の全 β 放射能及び集塵終了6時間後の全 β 放射能を測定	2分間平均値、10分間平均値及び1時間平均値をテレメータにより取得する。
測定器	α 線: ZnS(Ag)シンチレーション検出器 β 線: フラッシュシンチレーション検出器	
集塵時間	6時間	
集塵方法	平面集塵(ろ紙間欠自動移動方式)	
使用ろ紙	HE-40T(ロール状)	
大気吸引量	約100L/min	
測定値	<p>(1) 集塵中の全α・全β放射能比及び全β放射能 時刻<i>i</i>における放射能濃度をN_{Ri}とすると</p> $N_{Ri} (\text{Bq}/\text{m}^3) = \frac{(\text{計数率 } R_i (\text{cps}) - BG (\text{cps})) \times 2}{\left(\frac{A_1}{100} \times 0.5\right) \times \frac{A_2}{100} \times \frac{\text{ダスト流量 } (\ell)}{1000}}$ <p>ここで、時刻<i>i</i>の全α放射能を$N_{Ra i}$、全β放射能を$N_{R\beta i}$とすると、全α全β放射能比N_iは</p> $N_i = \frac{N_{R\beta i}}{N_{Ra i}}$ <p>(2) 集塵終了6時間後の全β放射能 集塵が終了してから6時間経過した後の時刻<i>i</i>における全β放射能濃度をN_{Si}とすると</p> $N_{Si} (\text{Bq}/\text{m}^3) = \frac{\text{計数率 } S_i (\text{cps}) - BG (\text{cps})}{\left(\frac{A_1}{100} \times 0.5\right) \times \frac{A_2}{100} \times \frac{\text{ダスト流量 } (\ell)}{1000}}$ <p>となる。</p> <p>A1:機器効率 (%) A2:捕集効率 (%) BG:バックグラウンド計数率</p>	
テレメータへの送信間隔	2分ごと	

② 核種分析

ア γ 線放出核種

項目	内 容	備 考
対象核種	γ 線放出核種	
測定方法	ゲルマニウム半導体検出器による機器分析 放射能測定法シリーズ「ゲルマニウム半導体検出器によるガンマ線スペクトロメトリー」に準拠	
前処理方法	放射能測定法シリーズ「ゲルマニウム半導体検出器等を用いる機器分析のための試料の前処理法」に準拠 詳細については、「2 試料の採取・前処理方法」参照	
測定器	ゲルマニウム半導体検出器	
測定試料形態	①浮遊塵：灰化物（集塵ろ紙 1か月分） ②降下物：蒸発残渣物（1か月分） ③陸 水：蒸発残渣物（20L 分）（⑦を除く。） ④海 水：二酸化マンガン法による沈殿物（10L 分） ⑤土壤、海底土：乾燥細土（容器高さ 5cm 分） ⑥農畜産物、海産生物、指標生物：灰化物（20～40g 灰程度） （⑦を除く。） ⑦陸水、大根（葉部）、原乳、藻類及び松葉中の I-131 並びに「緊急事態が生じた場合への平常時からの備え」を目的とした測定試料については直接法（2L マリネリ容器）	
測定容器	U-8 容器 マリネリ容器（直接法）	
測定時間	20,000 秒（I-131 測定用） 50,000 秒（直接法以外） 80,000 秒（I-131 以外の直接法）	

【報告対象核種】

対象核種	半減期	主な着目エネルギー (keV)	生成反応	備 考
⁶⁰ Co(コバルト 60)	5.2719 年	1332.470	放射化生成物	
¹³¹ I(ヨウ素 131)	8.040 日	364.480	核分裂生成物	
¹³⁴ Cs(セシウム 134)	2.062 年	604.66	放射化生成物	
¹³⁷ Cs(セシウム 137)	30.174 年	661.638	核分裂生成物	
⁷ Be(ベリリウム 7)	53.29 日	477.593	自然放射性核種	
⁴⁰ K(カリウム 40)	12.77 億年	1460.75	自然放射性核種	

(注) 上記以外の人工放射性核種が検出された場合には報告対象となる。

【その他着目すべき核種】

対象核種	半減期	主な着目エネルギー (keV)	生成反応	備 考
⁵¹ Cr(クロム 51)	27.701 日	320.0761	放射化生成物	
⁵⁴ Mn(マンガン 54)	312.20 日	834.827	放射化生成物	
⁵⁸ Co(コバルト 58)	70.78 日	810.755	放射化生成物	
⁵⁹ Fe(鉄 59)	44.56 日	1099.224	放射化生成物	
¹³³ I(ヨウ素 133)	20.8 時間	529.872	核分裂生成物	

(注) 上記の核種は、中部電力における放出管理上の対象核種である。

イ ストロンチウム 90

項目	内 容	備 考
対象核種	⁹⁰ Sr (半減期 : 28.74 年) ⁹⁰ Y (半減期 : 64.1 時間)	⁹⁰ Sr の娘核種である ⁹⁰ Y を測定
測定方法	放射性ストロンチウム分析 放射能測定法シリーズ「放射性ストロンチウム分析法」に準拠	
測定器	低バックグラウンド 2 π ガスフロー計数装置	
前処理方法	イオン交換法 詳細については、「2 試料の採取・前処理方法」参照	
測定容器	ステンレススチール皿	
試料形態	放射化学的単離物	
測定時間	80 分	

ウ　トリチウム

項目	内 容	備 考
対象核種	${}^3\text{H}$ (半減期 : 12.33 年)	
測定方法	トリチウム分析 放射能測定法シリーズ「トリチウム分析法」に準拠	
測定器	低バックグラウンド液体シンチレーション計数装置	
前処理方法	蒸留抽出 詳細については、「2 試料の採取・前処理方法」参照	
測定容器	100mL テフロンバイアル	
試料形態	水 (蒸留)	
使用シンチレータ	ウルチマゴールド LLT (試料 : シンチレータ = 5:5 混合)	採取量不足の場合はこの限りではない。
測定時間	10 分 × 20 回 × 3 サイクル	

エ　プルトニウム 238 及びプルトニウム 239+240

項目	内 容	備 考
対象核種	${}^{238}\text{Pu}$ (半減期 : 87.7 年) ${}^{239}\text{Pu}$ (半減期 : 2.411 万年) + ${}^{240}\text{Pu}$ (半減期 : 6,563 年)	${}^{239}\text{Pu}+{}^{240}\text{Pu}$ は両核種の和を求める方法である。
測定方法	プルトニウム分析 放射能測定法シリーズ「プルトニウム分析法」に準拠	
測定器	シリコン半導体検出器	
前処理方法	陰イオン交換法 詳細については、「2 試料の採取・前処理方法」参照	
測定容器	ステンレス鋼板	
試料形態	電着物	
測定時間	24 時間	

(3) 排水の全計数率

項目	内 容	備 考
測定対象	γ (X) 線	
測定方法	放水口モニタによる連続測定	2分間平均値及び10分間平均値を取得する。
測定器	3インチ×3インチ NaI(Tl)シンチレーション検出器	
測定範囲	バックグラウンドレベル～ 3×10^4 cps	
テレメータへの送信間隔	10分ごと（緊急時は2分ごと）	

※ 「放射能測定法シリーズ」は、文部科学省又は原子力規制庁が作成した環境放射線モニタリングのマニュアルで、放射線・放射能の測定・分析の際の手順を定めたものとして自治体等で用いられている。このほかに、技術情報を広く共有することを目的とした「技術参考資料」が作成されている。

2 試料の採取・前処理方法

試 料	採取・前処理方法等	単 位	備 考 ¹⁾
大気中浮遊塵	長尺ろ紙(HE-40T)に捕集し、灰化	mBq/m ³	
陸水(上水)	マリネリ容器に入れ直接測定	Bq/L	¹³¹ I
	加熱し、蒸発濃縮	mBq/L	
	蒸発濃縮物から放射化学的に単離(イオン交換法)	mBq/L	⁹⁰ Sr
	蒸留	Bq/L	³ H
土 壤	表層土を採土器を用いて採取し、乾燥後、ふるい分け	Bq/kg 乾土	
	乾燥細土から放射化学的に単離(イオン交換法)	Bq/kg 乾土	⁹⁰ Sr
	乾燥細土から放射化学的に単離(陰イオン交換法)し、電気化学的に分離	Bq/kg 乾土	²³⁸ Pu、 ²³⁹⁻²⁴⁰ Pu
玄 米	全量を灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
す い か	可食部を乾燥・灰化		
キ ャ ベ ツ	洗净後、可食部を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
白 菜	洗净後、可食部を乾燥・灰化		
たまねぎ	洗净後、可食部を乾燥・灰化		
白ねぎ	洗净後、可食部を乾燥・灰化		
かんしょ	洗净後、可食部(皮は残す)を乾燥・灰化		
大根(葉部)	洗净後、マリネリ容器に入れ直接測定		¹³¹ I
大根(根部)	洗净後、細根を取り除き、乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
み か ん	可食部(皮を除く)を乾燥・灰化		
茶 葉	茎、枝等を除いた葉部を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
原 乳	マリネリ容器に入れ直接測定	Bq/L	¹³¹ I
	全量を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
降下物(雨水・ちり)	大型水盤で1か月分採取し、加熱し、蒸発濃縮	Bq/m ²	
松 葉	茎、枝等を除いた葉部をマリネリ容器に入れ直接測定	Bq/kg 生	¹³¹ I
	茎、枝等を除いた葉部を乾燥・灰化		
大気中水分	シリカゲルに1か月分採取し、加熱し採取後、蒸留	Bq/m ³ (大気) Bq/L(水分)	³ H
海 底 土	表層土を採土器を用いて採取し、乾燥後、ふるい分け	Bq/kg 乾土	
し ら す	洗净後、乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
ひ ら め	洗净後、可食部(肉部)を乾燥・灰化		
あ じ	洗净後、可食部(肉部)を乾燥・灰化		
か さ ご	洗净後、可食部(肉部)を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
さ ざ え	可食部(内臓を除き体液は含まない)を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
は ま ぐ り	可食部(体液も含む)を乾燥・灰化		
か き	可食部(体液も含む)を乾燥・灰化		
いせえび	可食部(肉部)を乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
た こ	洗净後、可食部(頭部、内臓、目、口を除く)を乾燥・灰化		
な ま こ	洗净後、可食部(内臓を除く)を乾燥・灰化		
わ か め	洗净後、茎を除き、マリネリ容器に入れ直接測定		¹³¹ I
	洗净後、茎を除き、乾燥・灰化		
	灰化物から放射化学的に単離(イオン交換法)		⁹⁰ Sr
海 水	表面海水を採取後、化学的に共沈(二酸化マンガン法)	mBq/L	
	蒸留	Bq/L	³ H
そ の 他 ²⁾	(洗净後、可食部等を)マリネリ容器に入れ直接測定		

注1) 特に断りのないものについては、ヨウ素131以外のγ線放出核種を対象としている。

注2) 陸水、農畜産物及び海産生物のうち、「緊急事態が発生した場合への平常時からの備え」を目的としたγ線放出核種分析を対象とする。

3 測定値の表示方法

実施項目	測定対象	単位	表示方法
空間放射線量率の測定	γ 線	nGy/h	整数 (小数第1位四捨五入)
積算線量の測定	γ 線	mGy (90日換算値)	小数第2位 (小数第3位四捨五入)
環境試料中の放射能の測定	大気中浮遊塵	α 線、 β 線	無次元 (集塵中の全 α ・全 β 放射能比) Bq/m ³ (集塵中の全 β 放射能及び集塵終了6時間後の全 β 放射能)
		γ 線放出核種	mBq/m ³
	農畜産物 海産生物	γ 線放出核種 Sr-90	Bq/kg 生
	陸水 海水	γ 線放出核種 H-3 Sr-90	mBq/L (γ 線放出核種、Sr-90) Bq/L (H-3)
	土壤	γ 線放出核種 Sr-90 Pu-238, Pu-239+240	Bq/kg 乾土
	海底土	γ 線放出核種	Bq/kg 乾土
	降下物	γ 線放出核種	Bq/m ²
	指標生物 (松葉)	γ 線放出核種	Bq/kg 生
	大気中水分	H-3	Bq/m ³ (大気中) Bq/L (捕集水中)
排水の全計数率の測定	排水	γ 線	cps
			有効数字2桁 (3桁目四捨五入)
			※ 測定値は標準偏差の有効数字1桁目までを記載する。(測定値が3桁以上となることもある。)

4 測定結果の表記方法

(1) 「検出されず」と「検出限界未満」

ア 「検出されず」

「測定値 $X_A \pm$ 標準偏差 σ 」と表記される測定については、測定値 X_A が 3σ 未満 ($X_A < 3\sigma$) の場合、「検出されず」と表記する。

イ 「検出限界未満」

ダストモニタによる全 α 放射能及び全 β 放射能の測定については、測定値 X_A が $3\sqrt{2}\sigma_b$ 未満 ($X_A < 3\sqrt{2}\sigma_b$) の場合、「検出限界未満」と表記する。

(2) 各機関の測定結果の取扱

1つの測定(採取)地点に対し、県と中部電力が同じ測定を行う場合においては、両者の測定結果を採用することとし、「A～B」(2者の測定値がAとBでA < Bの場合)と表記する。

5 測定目標値

測定目標値とは、平常時モニタリングの目的を実現するため、現在のモニタリングの技術的水準を踏まえ、最低限測定することが必要な検出下限値をいう。

測定及び試料ごとの測定目標値を以下に示す。

(1) 周辺住民等の被ばく線量の推定及び評価

ア ゲルマニウム半導体検出器による機器分析

試 料	測 定 目 標 値				単位	供試量
	Co-60	I-131	Cs-134	Cs-137		測定時間
大気中浮遊塵	0.02	—	0.02	0.02	mBq/m^3	$4 \times 10^3 \text{m}^3$
						50,000 秒
陸水	8	—	8	8	mBq/L	20L
						50,000 秒
陸水（直接法）	—	0.2	—	—	Bq/L	2L
						20,000 秒
農産物・海産生物	0.2	—	0.2	0.4	$\text{Bq}/\text{kg 生}$	灰 40g 相当
						50,000 秒
農産物・海産生物 (直接法)	—	0.8	—	—	$\text{Bq}/\text{kg 生}$	$2 \times 10^3 \text{cm}^3$ 相当
						20,000 秒
原乳	0.1	—	0.1	0.2	$\text{Bq}/\text{kg 生}$	5L
						50,000 秒
原乳（直接法）	—	0.2	—	—	Bq/L	2L
						20,000 秒

イ 放射性ストロンチウム分析

試 料	測定目標値	単位	供試量
	Sr-90		測定時間
陸水	0.4	mBq/L	100L
			80 分
農産物・海産生物	0.2	$\text{Bq}/\text{kg 生}$	灰 10g 相當
			80 分
原乳	0.2	$\text{Bq}/\text{kg 生}$	灰 10g 相當
			80 分

(2) 環境における放射性物質の蓄積状況の把握

ゲルマニウム半導体検出器による機器分析

試 料	測定目標値	単位	供試量
			測定時間
土壤・海底土	3	Bq/kg 乾土	100g 乾土
			50,000 秒

(3) 緊急事態が発生した場合への平常時からの備え

ア ゲルマニウム半導体検出器による機器分析

試 料	測 定 目 標 値			単位	供試量
	Co-60	Cs-134	Cs-137		測定時間
農産物・海産生物 (直接法)	0.2	0.2	0.4	Bq/kg 生	2×10 ³ cm ³ 相当
					80,000 秒
原乳 (直接法)	0.2	0.2	0.4	Bq/L	2L
					80,000 秒
陸水 (直接法)	80	80	80	mBq/L	2L
					80,000 秒
土壤	3	3	3	Bq/kg 乾土	100g 乾土
					50,000 秒

イ 放射性ストロンチウム分析

試 料	測定目標値	単位	供試量
			測定時間
陸水	0.4	mBq/L	100L
			80 分
土壤	0.4	Bq/kg 乾土	100g 乾土
			80 分

ウ トリチウム分析

試 料	測定目標値	単位	供試量
			測定時間
陸水・海水	1	Bq/L	50mL
			10 分×20 回×3 サイクル

エ プルトニウム分析

試 料	測定目標値		単位	供試量
	Pu-238	Pu-239+240		測定時間
土壤	0.04	0.04	Bq/kg 乾土	50g 乾土
				24 時間

(4) 補足参考測定

ア ゲルマニウム半導体検出器による機器分析

試 料	測 定 目 標 値				単位	供試量
	Co-60	I-131	Cs-134	Cs-137		測定時間
降下物	0.8	—	0.8	0.8	Bq/m ³	1か月分
						50,000秒
松葉	0.2	—	0.2	0.4	Bq/kg 生	灰40g相当
						50,000秒
松葉（直接法）	—	0.8	—	—	Bq/kg 生	2×10 ³ cm ³ 相当
						20,000秒
海水	8	—	8	8	mBq/L	10L
						50,000秒

イ トリチウム分析

試 料	測定目標値	単位	供試量
			測定時間
大気中水分 (捕集水)	1	Bq/L	50mL
			10分×20回×3サイクル
大気中水分 (空気)	0.05	Bq/m ³	50mL
			10分×20回×3サイクル

6 測定等の委託

測定等（試料の前処理を含む。）を委託する場合には、委託先のデータの品質が適切な方法により十分なレベルを確保していることを調査する。

第2 評価方法

1 測定値の変動と平常の変動幅

測定値は、主に以下の原因により変動が起こりうる。

- (1) 試料の採取及び処理方法、測定器の性能、測定方法等の測定条件の変化
- (2) 降雨、降雪、雷、積雪等の気象要因並びに地理及び地形上の要因等の自然条件の変化
- (3) 核爆発実験等の影響
- (4) 医療及び産業用の放射性同位元素等の影響
- (5) 原子力施設の運転状況等の変化

一方、原子力発電所の通常運転時又は運転停止時であって、測定条件等が適切に管理されている場合においては、(3)及び(4)の原因による測定値の変動を除き、測定値の変動がある一定の幅の中に収まると考えられる。この幅を「平常の変動幅」という。

平常の変動幅は、別記1に記載の方法により設定し、年度ごとに見直すこととする。

2 原因調査等

測定実施機関は、測定値が平常の変動幅内に収まっているかどうかを確認し、平常の変動幅を逸脱した場合は、別記2に記載の方法により原因調査等を行うものとする。

技術会は、測定実施機関が行った原因調査等の報告を受け、それが妥当であるかを確認する。

3 測定結果の評価

測定値が平常の変動幅の上限を超過した場合、原因調査の結果から、浜岡原子力発電所からの環境への影響の有無を評価する。

評価の対象とする測定は、別記3に掲げるとおりとする。

4 被ばく線量の推定及び評価

3の評価の結果、浜岡原子力発電所からの影響があったと評価した場合（影響があった可能性を否定できないと評価した場合を含む。）、別記4に記載の方法により、浜岡原子力発電所周辺住民等の被ばく線量の推定及び評価を行う。

5 異常事態の対応

常時監視している空間放射線量率等の測定値が上昇し、事業者から発電所内で異常等があった旨の通報を受けた場合や空間放射線量率のスペクトル解析により発

電所からの影響を示唆する測定値を検出した場合、その他これらに類する事象が発生した場合には、空間放射線量率等の監視の強化並びに環境試料の採取及び測定を拡充する。※

また、必要に応じ、浜岡原子力発電所周辺住民等の被ばく線量の推定及び評価を行う。

※ モニタリングステーションのデータ確認を頻繁に行うことやダストモニタのろ紙送り間隔を短縮することに加え、可搬型モニタリングポスト等を設置することにより、空間放射線量率等の分布及び経時的変化を把握する。また、発電所の状況や時期に応じ、適当な環境試料を選定し、採取及び測定数を増やす。

別記1 平常の変動幅の設定方法

1 共通事項

測定値は、統計処理した結果が正規分布ではないことから、過去の一定期間における最小値と最大値の範囲を平常の変動幅とする。

ただし、平常の変動幅の設定にあたっては、次の点を考慮する。

- ・ 自然条件以外の原因で平常の変動幅を外れた特異的な測定値は対象データから除くこととする。
- ・ 測定環境の変化等（測定地点周辺の環境の変化、測定器の更新等）に伴い、測定値に有意な変化が生じた場合には、必要に応じて変化前の測定値を合理的な方法により補正して求めた値を対象データとする。

なお、全ての測定対象について平常の変動幅を設定するが、過去の測定が規定した期間に満たない場合は「過去の値」と表記することとする。

2 空間放射線量、大気中浮遊塵の放射能（連続測定）及び放水口モニタ

空間放射線量、大気浮遊塵の放射能（連続測定）及び放水口モニタに係る平常の変動幅を設定するための対象期間は、過去5年間とする。

なお、測定地点ごとに自然放射性核種の変動状況が異なることから、測定地点ごとに平常の変動幅を設定することとする。

3 環境試料中の放射能（大気中浮遊塵の放射能（連続測定）を除く。）

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震を起因とする東京電力福島第一原子力発電所事故（以下「東電事故」という。）では、環境中に放射性物質が多く放出され、本技術会の対象地域もその影響を受けることとなった。

空間放射線量とは異なり、環境試料中の放射能の測定結果は、現在も東電事故の影響が残存していることを示唆するものとなっている。

このことから、環境試料中の放射能（大気中浮遊塵の放射能（連続測定）を除く。）については、東電事故以前の測定値を基に、試料の種類ごとに平常の変動幅を設定することとし、その対象期間を東電事故以前の5年間とする。

なお、試料の種類が同一であっても、性状等が明らかに異なる場合は、それらを分けて設定することとする。

また、東電事故以降の測定値の最小値と最大値の範囲を「震災後の変動幅」とし、平常の変動幅を上回った場合に実施する原因調査の参考とする。

別記2 平常の変動幅を逸脱した場合の原因調査等の方法

1 平常の変動幅の上限を上回った場合の対応

(1) 大気中浮遊塵の放射能（連続測定）以外

測定値が平常の変動幅の上限を上回った場合、測定実施機関は次の手順で調査を行い、その原因を特定する。ただし、評価の対象としない測定については、ウの調査のみを実施する。

ア 発電所内の情報を収集するとともに、エリアモニタリング設備等※の異常値及び発電所外への放出（管理放出を含む。）の状況を調査する。

※ エリアモニタリング設備等とは、発電所内の格納容器雰囲気モニタ、燃料交換エリア換気モニタ、モニタリングポスト等をいう。

イ アの調査の結果、発電所内に異常等が認められた場合、空間放射線量率等の監視の強化並びに環境試料の採取及び測定を拡充する。*

また、技術会は臨時会等を開催し、対応を協議する。

※ モニタリングステーションのデータ確認を頻繁に行うことやダストモニタのろ紙送り間隔を短縮することに加え、可搬型モニタリングポスト等を設置することにより、空間放射線量率等の分布及び経時的变化を把握する。また、発電所の状況や時期に応じ、適当な環境試料を選定し、採取及び測定数を増やす。

ウ アの調査の結果、発電所内に異常等が認められない場合は、次に掲げる事項の中から必要な調査を実施する。

- ① 降雨等の気象要因による自然放射性核種の変動
- ② 測定器及び関連機器の健全性
- ③ 試料の採取方法及び前処理方法の妥当性（手順違い、他の試料等の混入等）
- ④ 測定方法等の変更や測定器の更新による影響
- ⑤ 測定地点周辺の環境の変化
- ⑥ 核爆発実験等による影響
- ⑦ 非破壊検査等の放射線を利用した事業活動
- ⑧ 周辺での医療用放射線源の使用や放射性医薬品を投与された患者の接近
- ⑨ 他の原子力施設からの影響
- ⑩ 発電所に由来しない放射性物質の持込、流入、接近等
- ⑪ 測定結果の経時的变化及び他の測定や他地点（試料）の測定結果
- ⑫ 検出された核種以外の人工放射性核種の検出状況
- ⑬ その他

エ ウの調査により原因を特定できない場合は、発電所からの影響があった可能性を否定できないと考え、その当否について技術会に諮るものとする。

(2) 大気中浮遊塵の放射能（連続測定）

集塵中の全 α ・全 β 放射能比と集塵中の全 β 放射能の両方の測定結果が同時に平常の変動幅を上回った場合、測定実施機関は(1)と同様の手順で調査を行い、その原因を特定する。このとき、集塵終了6時間後の全 β 放射能の測定結果も参考にする。

2 平常の変動幅の下限を下回った場合の対応

(1) 空間放射線量率及び排水の全計数率

測定値が平常の変動幅の下限を下回った場合、測定実施機関は次に掲げる事項の中から必要な調査を行い、その原因を特定する。

- ① 降雨等の気象要因による自然放射性核種の変動
- ② 測定器及び関連機器の健全性
- ③ 測定方法等の変更や測定器の更新による影響
- ④ 測定地点周辺の環境の変化
- ⑤ 車両等の遮蔽物の存在
- ⑥ その他

(2) (1)の測定以外

測定値が平常の変動幅の下限を下回った場合、測定実施機関は相互に妥当性を確認し、妥当性に疑いがあると認められる場合にあっては、その原因を特定する。

別記3 評価対象項目

次の測定以外の実施項目を3の評価の対象とする。

- ・ 「緊急事態が発生した場合への平常時からの備え」のみを目的としたもの。
- ・ 補足参考測定

別記4 被ばく線量の推定及び評価の方法

1 外部被ばくによる実効線量

発電所寄与分の外部被ばくによる実効線量は、空間放射線量率の1時間平均値が平常の変動幅の上限を超過した事象（以下「上昇事象」という。）を対象に、以下の式により算出する。

$$\begin{aligned} & \text{発電所寄与分の外部被ばくによる実効線量 } (\mu\text{Sv}) \\ & = \Sigma (\text{上昇事象中の空間放射線量率} - \text{上昇事象前後の平均空間放射線量率}) (\mu\text{Gy/h}) \\ & \quad \times \text{上昇事象中の経過時間 (h)} \times 0.8 (\mu\text{Sv}/\mu\text{Gy}) \end{aligned}$$

また、年間の外部被ばくによる実効線量については、発電所寄与（発電所寄与である可能性を否定できない場合を含む。）が認められた上昇事象に対して算出された外部被ばくによる実効線量を年間分合計する。

2 内部被ばくによる預託実効線量

発電所寄与分の内部被ばくによる預託実効線量は、環境試料¹⁾中の放射能の測定結果から、以下の式により算出する。

$$\begin{aligned} & \text{預託実効線量 } (\mu\text{Sv}) \\ & = \text{実効線量係数 } (\mu\text{Sv}/\text{Bq})^{2)} \times \text{年間の核種摂取量 (Bq)}^{2)} \times \text{市場希釈補正}^{2)} \times \text{調理等による減少補正}^{2)} \end{aligned}$$

また、年間の内部被ばくによる預託実効線量については、発電所寄与が認められた対象試料ごとに、内部被ばくによる預託実効線量を算出し、それらを年間分合計する。

注1) 対象試料は、大気中浮遊塵、葉菜、牛乳、魚、無脊椎動物、海藻類、米、水及び茶とし、それぞれ1種類を選定する。

ただし、採取時期等の都合上、対象試料を採取していない（できない）場合は、それに類する適当なもので代替することができるものとする。

注2) 「平常時モニタリングについて（原子力災害対策指針補足参考資料）」（原子力規制庁）、その他適当な資料を参照し設定する。

3 被ばく線量の年間総合評価

1及び2で算出した外部被ばくによる実効線量と内部被ばくによる預託実効線量を合計することにより、年間の被ばく線量を推定する。

発電所周辺住民等の被ばく線量の評価については、公衆の年線量限度である1mSvを十分に下回っていることを確認することとし、その比較対照を年50μSv[※]とする。

※ 「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」（原子力委員会）において、発電用原子炉施設が通常運転時に環境に放出する放射性物質によって施設周辺の公衆の受ける線量目標値は、実効線量で年間50μSvとされている。